

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#003(高橋) (2022/05/03 uploaded)
<https://www.youtube.com/watch?v=EjxFnRG8pTE>

【武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所】研究動画シリーズ#003(高橋)(11:17)
<https://www.youtube.com/watch?v=EjxFnRG8pTE>



みなさん、こんにちは。武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所の高橋と申します。どうぞよろしくお願
い致します。

今回の私の発表は「ヌーソロジー視点から見た国民国家概念変容への提起」と題しまして、お話を
させて頂きたいと思います。

**Research
Announcements**
#003

ヌーソロジー視点から見た
国民国家概念変容への提起

 武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所

announcer 高橋 暢雄

ニューソロジー視点から見た国民国家概念変容への提起

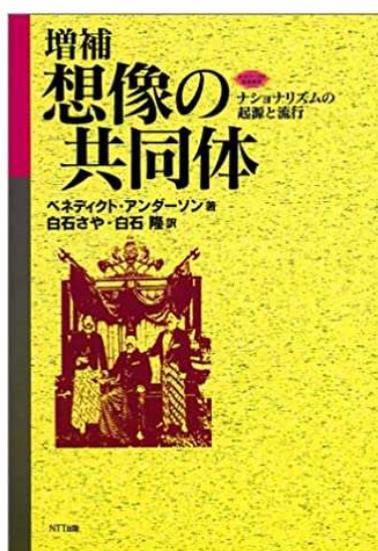
高橋 暢雄

ニューソロジーにおきまして、社会を照らした時にですね。いわゆる外面と内面の社会的な形の中でですね。機能的な国家や社会というものと、個人的に目の前の物として感じている空間というものは、全く別のものである。外面と内面ということですが、これが非常に基礎としてですね。重要な概念となっておりますが、これ関係した中でですね。私は今回「国民国家」と呼ばれる政治学社会学における概念を援用しまして、お話を申し上げたいと考えております。

まず、国民国家というものはどういうものかということですが、みなさまご存知の通り、17世紀にイギリスで市民革命等が起き、18世紀になりますとフランスでフランス革命が起こり、並行して産業革命が起き、工業化というものが農業中心の社会から工場のようなもので、そして、資本家や労働者がいる中で新しい産業を生み出していき、こういう変容が起きてきたことはご存知の通りです。その中で、国家という枠組みでは、絶対王政から、国民を中心にして産業化を発展させるという動きが自然発生してまいります。産業化というものは工場を必要と致しますので、多くの労働者を必要とし、またナポレオンはご存知の通り、従来のような軍人ではなく、一般市民が愛国心に燃えて戦いに参加をする。つまり、志願兵ですね。これを組織化するという事に注力しました。例えば、ひとつの小隊が七人であるとか、軍隊の組織を縦張りにして、横の相談は参謀以外のしてはいけないとか、軍は必ず上の命令だけを聞くとか。これはナポレオンは当時に作った仕組みが、現在の各国の軍隊でも用いられている例だと言われています。じゃあ、なぜそのようなことをしたのかと言うと、職業軍人のような方ではなく、一般人を訓練させることによって、新しく軍人として活用するということが必要になったわけです。で、結果、当然ナポレオンは一定以上の成果を治め、それを多くの人たちが見ることによってですね。いろいろなものに取り入れられていったということになります。と致しますと、当然国家レベルでは、それを定着させたいという形になることから、後世に言われたのが「国民国家」という概念になります。

国民国家は英語で表現しますと“nation state”。“nation”は「国家」という意味です。“state”も国家という意味です。では、なぜ“nation state”と言うのでしょうか。これは同じ国家でも意味合いが異なる国家という表現だということになります。“state”というのは、いわゆる仕組み上の国家です。官僚がいて、国の体制があつて、法律等が決まっています。ところが、そのような体制にですね。人々が愛着心を持ってくれるかということになると別になるわけです。それによって“nation”という概念が用いられまして、例えば、国旗をもっとプッシュする。国家としての概念をプッシュしていく。愛国心を盛り上げる。もしくは、文字や言語の標準化を行う。このようなものが理念等とかを活用しながらですね。人々の結束を図っていく。これが“nation”の働きになります。ですから、その新しい産業が起きてきた形で、国家を総力戦として使っていかなければいけない体制になると、教育から、国の体制から、そういう軍事的制度から、様々なものが変わってこなければいけなくなりまして、そのコンセプトと

して用いられたのが“nation state”——国民国家という形になるわけです。結果として、ヨーロッパでは、今まで小国にばらついてきたイタリアやドイツも統一されていくということになります。ちなみにですね。1983年にベネディクト・アンダーソンという人物が『想像の共同体』という本を出しまして、これが大変なベストセラーになったんですが、どのような本かと言いますと、“nation”の部分で、要するに、物語かをクリアしなければならなくなったという事例をたくさん集めているわけですね。例えば、スコットランドで男性がミニスカートを履いてタータンチェックでバグパイプを吹く。あれも実はずっと行われてなかったわけです。ところが、昔から継続しなくても、古い時代のものを掘り起こして、昔から続いているようにすることによって、その国の伝統、もしくは、大切にすべきもの、愛すべきものとして、その例示することになるわけです。例えば、日本の神式の結婚式も、あれはほぼ大正時代に確立したことになります。ですから、古く感じられるものを、現代に読み替えて出すことが、非常に重要になってくる社会となったということになりますね。これによって、長らく続いている。もしくは、例えば、『天皇のページェント』という本もあったんですが、これはページェントというのは儀式という意味ですけども、こういうようなもので、昔からあるようなものを復活させていく。大きなものは天皇の即位の大嘗祭から。これもご存知の通り即位環境というものが平安から仏教的に入り込むことで、大嘗祭というものは長らく行われていませんでした。しかし、明治国家を天皇中心に建てていこうという中で、明治以降大嘗祭を復活させ、昔から続いているものとして表現しているわけですね。それは一種復刻させたということです。即位礼もそうです。もしくは天皇が崩御されたときの儀式なんかもそうです。ですから、まさにページェントというものは、非常にそういうような長らく続いている国であれば、そういうものをいろいろ採り入れやすい体制にあったわけです。まあ、それらのことがベネディクト・アンダーソンによって『想像の共同体』という形でヒットしている形にもなります。



以上のように、国民国家のような概念というものは、われわれがニューソロジーにおいて、内面と外面というものがまったく別のものとして存在していると認識すべきだということの一つの証左にもなります。いわば外面的な概念のものもやらなければいけないと同時に、内面的なものも満たしていかなければですね。国家として機能しにくいわけですね。いざというときに。ということは外面も内面も共にどちらが上・下ではなくて、必要なものであるということが大変こういう事例からもよくわかるんです。ですから、ニューソロジーにおいて、外面が先手であるとか、外面が ϕ の奇数で、じゃあ内面が偶数ですとか、そういうものの以前に、そういう形で行っていくものが必要となると思います。また、他の発表でも類似を申し上げていきますが、例えば、私の理解では、道徳と倫理というものも大きく異なるもので、道徳というものは社会に影響を受けて社会を円滑化させていくもの。ですから内面的ですよ。この場合では“state”に当たります。倫理というものは、人としてというものですので、社会や時代に影響され得るもののレベルではありませんので、これはこの“nation”に当たるような部分でもあるわけです。まあもちろん“nation state”と内面・外面は完全にリンクしているわけでもありませんし、道徳と倫理も丸っきりリンクしているわけでもありません。そこはご注意頂きたいんですが、このような機能が分かれているということによって、内面と外面という考え方が非常に重要であることにもご理解が深まるのではないかと考えています。

今回の発表は以上で終了させていただきます。また次の発表でお会いしたいと思います。どうもありがとうございました。(10:54/11:17)(了)

(出典:【武蔵野学院大学ニューソロジー研究所】研究動画シリーズ#003(高橋)
(2022/05/03 uploaded)
<https://www.youtube.com/watch?v=EjxFnRG8pTE>)